

語り場面における参与者の視線行動の分析

伝研究室 17L1068Y 田村好誠

1. 序論

1.1. 先行研究

通常の順番交替、視線について

- ・ **順番交替システム**：Sacks(1974)で示された、話者が円滑に交替し、「一時に一人が話す」という状態が達成されるためのメカニズム。
- ・ 伝 (2007)：三人会話における視線を含むしぐさを分析。順番交替において**視線**は重要な意味を持つ。

「語り」について

- ・ **語り**：串田 (2009) では、相互行為の中で複数の文や節を連ねて、自分の体験や誰かから聞いた出来事を描写する活動と定義。
- ・ Sacks(1992)：語り手は複数の連続した発話を行うためのスペースを確保する必要がある。また、聴き手はそのことを承認し、語りが終了するまで発話を控えることが期待される。

1.2. 研究の目的

視線は、通常の順番交替を保留した語りの場面においては、次話者選択のテクニックとしてではなく、他の参与者へ向けた意識の表れだと考えられる。そのような視線をもとに、語り手からの意識の向けられ方の差という点での聴き手の立場という構造的違いの有無について検討する。また、そのような違いをもたらす要因についても考える。

2. 分析 1 語り手ごとの視線の均等化の分析

2.1. 目的

多人数会話では、話者は全ての参与者に配慮した発話内容のデザインが求められ、特に、語りにおいては、より聴き手への意識が求められる。そのため、語り手は、両方の聴き手に対して均等に視線を向けるようにし、語り単体で偏りが生じる場合には会話全体での均等化を行うという仮説のもと、分析を行った。

2.2. 方法

データ

「千葉大学3人会話コーパス」(Den & Enomoto, 2007)のうち語りが含まれる10データを使用した。

手続き

各語り内に含まれる視線を Excel に出力、R を用いて集計、可視化を行い分析した。

語り内の視線の抽出は図 1 のようにした。また、視線の生起回数ではなく、語りの時間に対する視線が向けられている時間の割合（視線割合）を求めて、会話全体で平均化したもの（平均割合）を用いた。

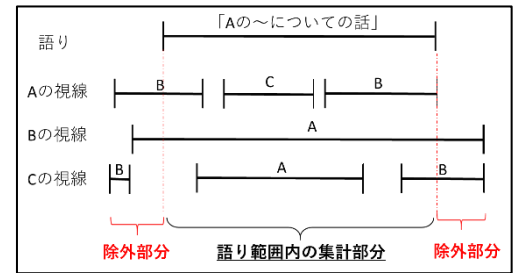


図 1 語りに含まれる視線の範囲

2.3. 結果・考察

- ・ 視線の向け先が均等な語りもあれば、そうでない語りもあった（表 1）。
- ・ 各語りには、その語りが何のために行われているのかという「語りの目的」があり、そのことが視線の差を生じさせる要因になったと考えられる。
- ・ 「語りの目的」は文脈によって決まるため、会話全体でバランスを取るような均等化は起こらず、平均割合にも差が生じたと考えられる。

表 1 視線割合と平均割合の結果

	全語り		全語り手		
	均等	不均等	均等	差が小さい	差が大きい
語りの数	4	48	2	4	16

3. 分析 2 語りの出現位置条件ごとの均等化の分析

3.1. 目的

両方の聴き手への意識がより望まれそうな特定の場面の語りに絞り、視線の向け先の均等化が行われているか調べる。

3.2. 方法

データ 分析 1 と同様。

手続き

分析 1 で算出した視線割合を用いた。また、会話全体の構造、流れなどを調べるために実際の会話の内容についても加味した。

3.3. 結果

- ・ 会話全体における最初の語り、会話中で最初に語り手となった者の語り全体については必ずしも均等化がはたらいているとは言えなかった（表 2）。
- ・ 新たな話題での最初の語りに関しては該当するものが 2 つのみであり、両方とも不均等であった。
- ・ 特定のデータにおいてのみ、各語り中の視線が全体的に均等であるものが見られた。

表 2 各データにおける最初の語りと最初の語り手の視線の結果

	最初の語り		最初の語り手			
	均等	不均等	均等	差が小さい	差が大きい	
語りの数	2	8	語り手の数	2	2	6

3.4. 考察

両方の聴き手に対する意識よりも、直前のやり取りなどから推測される「語りの目的」の影響の方が強いことがわかった。また、語り手からの意識の向け方に差があることから、聴き手間で構造的な違いがあると考えられる。

4. 分析 3 聴き手間の構造的違いの要因分析

4.1. 目的

「語りの目的」が決まる要因としては、直前のやり取りや流れなどの局所的な要因と、会話全体や複数の語りにまたがるような大局的な要因があると考えられる。それらの要因がどのようなにはたらき、また、その結果としての「語りの目的」によってどのような視線の差が生じるのかについて調べる。

4.2. 方法

データ 分析 1、2 と同様。

手続き

分析 2 同様、視線割合をもちいつつ、ELAN でのデータで会話内容をより詳細に検討し、また、参加者の情報（年齢、学年など）についても加味しつつ、分析を行った。

各語りの内容やきっかけとなった発話などから語りの目的を推定した。語りの目的は「遂行行為」と「先行文脈との関連」という二つの側面から考え、それらを踏まえて多く視線を向けられると考えられる聴き手を推定した（表 3）。

語り直前のやり取りなどの状態を局所的状況としてまとめ、そこから多く視線を向けられると考えられる聴き手を推定した（表 4）。

語りの目的と局所的状況のそれぞれの推定した聴き手と、実際に多く視線を向けられていた聴き手との一致、不一致を調べる。

表 3 data1 における語りの目的とそこから多く視線を向けられると想定される聴き手

data	語り	語りの目的		目的から予想される聴き手
		遂行行為	先行文脈との関連（機能面）	
1	C-1	話題の創出・相談	話題の創出	なし
	C-2	具体例追加	連続（語り）	なし
	A-1	自論展開・相談への返答	特定の語りに対しての展開	C
	C-3	自論展開	特定の語りに対しての展開	A
	A-2	自論展開・相談への返答	特定の語りに対しての展開	C
	A-3	話題展開	話題の流れから展開	C
	B-1	第二の物語	特定の語りに対しての展開	A
	A-4	修復	特定の発話に対する展開	C
	C-4	第二の物語	特定の語りに対しての展開	A

表 4 data1 における局所的状況とそこから多く視線を向けられると想定される聴き手

data	語り	局所的状況	予想される聴き手
1	C-1	自ら。やり取り無し。	なし
	C-2	C-1と連続して	なし
	A-1	直前の発話者はC	C
	C-3	直前の発話者はA	A
	A-2	直前の発話者はC	C
	A-3	直前にA-C間でやりとり	C
	B-1	直前の発話者はA	A
	A-4	直前の発話者はC	C
	C-4	直前の発話者はA	A

4.3. 結果・考察

- ・ それぞれから想定される聴き手と、実際の状態の一致・不一致の結果は表 5 のようになった。
- ・ 視線の偏りに関しては局所的な語りの目的や局所的状況だけで決まるわけではなく、より大局的なものが要因となる場合があると考えられる。

表 5 それぞれから想定される聴き手と、実際の状態の一致・不一致

語りの目的		局所的状況	
一致	不一致	一致	不一致
36	16	32	20

5. まとめ

3人会話の語りの場面において語り手は両方の聴き手に対して意識を向けるのが望ましいと考えられるが、実際には意識（もしくはその表れとしての視線）には偏りが生じる場合がある。

そのような偏りは、何のために語られるのかという語り手の意図である「語りの目的」に加えて、直前のやり取りなどの局所的状況や、会話全体や複数の語りにまたがるような大局的なものが要因になると考えられる。